

人間探求学での交流の機会について

和田 有朗

環境政策・計画学科

1. はじめに

滋賀県立大学では1回生前期の必修科目として、人間探求学という科目がある。学科によって進め方は様々であるが、環境政策・計画学科では、少人数クラスの授業として開講している。2016年度においては、全15回のうち4回を1回生の学年担任（筆者）が担当する回として、学科の1回生の交流を深める授業を行ったので、その報告を行う。

2. 学生同士の交流について

本学科では、自分自身やチームで考え実践していく能力を育てることを重視している。

しかし入学して間もない時期は新たな環境に戸惑う時期であり、自身の意見を述べにくかったり、友人がまだできていなかったりするだろう。そこで、2016年度においては、4月に、学生同士の交流を行った。

これは、友人づくりだけでなく、コミュニケーション能力の向上、社会人基礎力の向上を目的としている。ここでいう「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」のような「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であり、経済産業省が2006年から提唱しているものでもある。

今回行った学生同士の交流についてであるが、当日は快晴に恵まれたため、学生の希望もあり学内の芝生で行った。この日は全15回のうち第3回目ということもあり、少しは大学生生活に慣れてきた頃であるが、学科40名のすべての学生とは話ができていない状態であり、今までに話をしたことがない人と話をするように促した。また、共通の話題や共感できたことを3つ挙げるまで話をするようにし、10名以上と話をする事とした。学生の様子を見ると、最初は話しかけるのに躊躇しているようだったが、何度か話しかけているうちに打ち解けていく様子が見て取れた。普段であれば話をする機会がないために、どのような人なのかお互いに理解しあえていなかったとしても、このような機会でも積極的に話をする事ができ、その後の大学生活でも話をするきっかけづくりになったのではないかと思う。

3. 学科教員との交流について

本学科では、卒業論文の指導に力を入れている。そのため、1回生の段階で、学生がどのような学術分野に興味があるかを教員が知っておくこと、また、教員が学生の考えや意見にコメントし、学生が卒業論文への意識を早い段階から持つ機会は有益だと考える。そこで、5月の3回において、学科の教員3名ずつが参加して学生との交流の機会を設けた。ここでは、学生を3グループに分け（各回でメンバーを極力重ならないように替えた）、各グループに1名の教員が加わって学生と話をする形式とした。最初に書記（発表者）を1名決め、その後、学生の興味のある学術分野と理由を1名4分程度で全員に発表させた。それをもとに、教員と学生で話をし、なぜその学術分野に興味があるのか等をグループ内で質疑応答を行った。書記（発表者）はグループ内でどのような話になったかを記録し、全体でのまとめ、ふりかえりの時間に発表を行った。学生にとっては、他の学生の意見を聞くことによって、他の学生の興味のある学術分野を知るきっかけになり、自分自身への刺激にもなったと考えられる。

教員からも、1回生の興味のある学術分野がどのようなものであるかがわかり良かったと感想をいただいた。

学生にとっては、同じ学科の学生以外に教員とも交流することができ、教員の専門分野や人柄を把握することができたと思うので、有意義な時間となったのではないかと思う。

4. おわりに

2016年度に新たに実施した人間探求学での交流の内容について報告をした。本学科での人間探求学の授業の進め方は年度によって多少の変更はあるものの、今回報告した交流の機会が、学生の今後の学生生活および卒業論文への一歩として役立ってくれればうれしい限りである。